

# 若者ことばの通時研究のための 連続テレビドラマのデータベース利用の有効性について\*

桑本裕二

An effect of databases made from serial dramas for a diachronic study of  
Japanese youth jargons *wakamono-kotoba*

Yuji KUWAMOTO

(平成27年11月16日受理)

In this study, I mainly suggest that a database of a script from serial TV dramas is the most effective for a diachronic study of *wakamono-kotoba*, i.e. a kind of jargons, spoken in younger generation. In Kuwamoto (2014), I suggested that the only several *wakamono-kotobas* are durative and survive for a long period while most of them are unstable and disappear in a short time. So *wakamono-kotobas* are essentially quite difficult to collect for some linguistic study, particularly on the diachronic basis.

A script of a TV drama might be a proper source compared to that of a stage play or a movie. Furthermore, compared to another TV program such as a variety show or a sports game, it might be better. As to duration of a TV drama, 8 to 9 hours are the most effective because there are many dramas of this type, perhaps 50 or more are produced in a year so that it is quite convenient to select proper one for the *wakamono-kotobas'* diachronic research.

I also suggest some proper conditions of such dramas so as to contain many vocabularies of *wakamono-kotobas*.

I actually select three serial TV dramas which should be researched effectively. Kuwamoto (2016, forthcoming) shows the result of a research and an analysis of them.

## 1. はじめに

「若者ことば」としてまとめられる語彙群がある。これは、「若者文化」と名づけることのできる特有のサブカルチャーのなかで使用されている語彙の総体であり、米川(2000, 2009)によれば、「若者」という一種の特定集団に使用される「集団語」と定義される。集団語である若者ことばは、当該集団の構成者の境界が固定的でなく、また通時的にみるならば、小矢野(2002)が指摘するように流行語の一部とみなされる場合、非常に移ろいやすく不安定な語群である。さらに、この語群は当該集団構成者の言語使用のすべてを網羅しているわけではなく、ほんの片面的な語彙、イントネーションなどの変異の集合体であって、安定した規範的日本語の語彙群とは一線を画しており、非常に分析しがたい語彙群で

あるとあってよい。その一方で、多くの表現上の豊かさを持ち、造語力に優れていることや(桑本2003a, b)、その通時変化の速さ(桑本2010, 2014)など、規範的な語彙には見られない特徴も多く、独特の語彙群でもある。

本稿は、使用者の範囲や使用場面が非常に不安定で、かつ個々の語彙収集が困難である若者ことばに対して、異なる年代の大規模な語彙の集合体のデータベースを作り、それらを比較・対照させることで、その通時変化を分析できる可能性と、連続テレビドラマのデータベース化が最も有効である点を論じたものである。

若者ことばは、基本的には音声をともなって発話されるはなしことばである。他方、書きことばであるメールやインターネットの書き込みに現れる一種独特の表現法も広義の若者ことばといえるかもしれ

ない。このような文字媒体の方がデータベースの資料は作成しやすく、分析もしやすいだろう。しかし、これらの表現法は、所詮は話し言葉の副次的なものであるか、顔文字など、音声をとまわらない、視覚的な効果のみに基づく表現法であるので、正統的なはなしことばの若者ことばとは区別し、本稿の考察からは排除する。本稿では、若者ことばは、あくまでも、本来的な、実際に若者達が発する会話から抽出できるものとみなし、それを音声素材としてデータベースの対象にする。

本稿では、若者ことばが豊富に現れやすいデータベースとして、連続テレビドラマの台詞を文字化したものを最も適したものとして考える。もともと若者ことばは、若者の日常的な発話のなかに、かすかに確認されうるような不安定な語彙群であるが、そのため、実際の自然発話の収録では、分析可能なほどの語彙を収集するのに非常に効率が悪い。そこで、テレビドラマを、利用しやすい会話の台詞の集合体とみなすのである。なお、テレビの音声からデータベースを作成しようとする場合、様々な種類の番組があって、自然発話が豊富に現れる、トークを多く含むバラエティ番組、スポーツの実況などがあるなかで、やはり擬似的ながらも豊富な日常的なシチュエーションを含むドラマの台詞が、自然会話に近い会話のやりとりを現出していることから、最適である点を指摘する。

また、台詞を介する他のジャンルの芸能、例えば、舞台演劇や映画に比べても、やはりテレビドラマが、若者ことばのデータベースとして優れている点も指摘する。

また、量的には連続テレビドラマの1作品分が最適である。ここでいう連続テレビドラマとは、週1時間全11話程度の、民放各社を中心に約3ヶ月放映されるものを指す。この種の連続ドラマは、CMや次回予告などを除くと、総時間は約8時間30分となるが、これだけの量の会話は、一定の件数の語彙を収集するためには適当な量であると考えられる。また、雑多なテーマ、背景のドラマの台詞を集めるのではなく、若者ことばが多用されているなどの特定の条件に限定したドラマの選択を行う場合、テレビ各局の年間の連続ドラマの総制作本数の多さから（年間約50本）、若者ことばを主に収集できるような条件にかなったものに限定して選択できる量的範囲も広くなり、連続テレビドラマの1作品分は、やはり一つのデータベースの単位として妥当なものであるといえる。

筆者は、このような連続ドラマのデータベースを、

若者ことばに特化したものとするためのドラマの選定基準を提案した。そして、その選定基準に沿ったドラマ作品を1990年代から約10年ごとに選定し、それらのデータベースを実際に作成した分析を行った。その成果は桑本（2016、編集集中）で報告しているが、本稿は、その分析、成果のための基礎となる考察である。

## 2. 若者ことば研究の系譜

### 2.1. 若者ことばの定義

若者ことばはある特定の個人、あるいは集団において、使用場面が限られ、言語使用のうちの限定的な語彙群にすぎない。したがって、非常に全体像がとらえにくく、分析対象としても非常に扱いにくい語彙群であるといえる。これまで言語学、国語学の分野内で統一的に研究されてきたことはなく、研究者個人の研究の独立性は極めて強く、他の研究成果と相互に関連づけることも容易ではない。「若者ことば」と呼称しうる語彙群に対して、「若者ことば（言葉）（若者が用いるから）」「キャンパス用語（主に大学等のキャンパス内で使用されるから）」「コギャル語（いわゆる「コギャル」が使用するから）」「女子大生用語（（男性よりむしろ）女子大生が使用するから）」など様々な呼称が存在し、それらの微妙な差異や定義が論じられることもなかった。

また、若者ことばの定義自体、おそらく今までの世相語研究において明確になされたものはほとんどない。そのなかで、桑本（2003a）で試案として示したものは次のとおりである。

- (1) 若者ことばの定義（試案）（桑本 2003a: 114, 一部改変）
  - a. 使用年齢層は10代後半から20代前半までを中心とする。当然個人差もある。
  - b. 語彙はなるべく特定の趣味集団のものに偏らない。
  - c. 年配の年齢層に使用が浸透しているもの、あるいは意味が知られているものについては、その分類を妨げない（「マジ」など）。

本稿において取り扱う若者ことばの認定、特定の範囲としては、この定義でほぼ十分である。もっとも、上記論文発表から現在（論文執筆時は2015年11月）まで12年経っており、その間、たとえば（1a）における年齢層の定義は若干の修正をする必要があるように思われる<sup>1)</sup>。今後若者ことばの定義自体、

時代に合わせて変更していく必要があるが、いずれにせよ、当面は(1)の定義に従うことでほぼ問題はない。

## 2.2. 先行研究における若者ことばの収集

若者ことばは、その定義自体が難しく、また語彙群の境界も不明瞭であるため、語彙を収集してまとめるということも極めて困難である。これまで学術的な目的で収集されてきた語彙集は、特定の時期、特定の大学内など、散発的、限定的で、なおかつそれぞれの独立性が強いものである。中東(2004)は「キャンパス言葉辞典リスト」として23におよぶ語彙集をリストアップしている。その一部を抜粋すると(2)のような項目がある。

### (2) 中東(2004:19f.)「キャンパス言葉辞典リスト」より

- ・岡山大学(2001, 2002年, 中東靖恵)
- ・フェリス学院大学(1998年, 馬瀬良雄・中東靖恵・小西優香)
- ・椛山女学院大学(1993年, 加藤主税)
- ・天理大学(1995年, 前田均)
- ・富山国際大学(1996年, 山崎恵)
- ・岐阜大学(1996年, 洞澤伸)
- など

また、筆者自身は東北大学において、1999～2000年に若者ことばの語彙を収集し、意味を分析したものをウェブページとして掲載している(桑本2006)。

これらの語彙集は、収集時期も地域も様々であり、統一的に扱って何かを分析することは困難である。

このような状況下にあつて、米川(1997)は質的、量的に充実したものであるといえる。米川(1997)は(3)に挙げるように複数の語彙集を収録したものとなっている。

### (3) 米川(1997)『若者ことば辞典』に収録された語彙集

- ・『外大語辞典 1994年版』(大阪外国語大学, 小矢野哲夫)
- ・『キャンパス用語集 1996年版』(京阪の高校生・大学生, 高山勉)
- ・『甲南大学キャンパスことば辞典』(1992年, 都染直也)
- ・『女子大生用語の基礎知識 1993年版』(金蘭女子短大, 小矢野哲夫)
- ・『専修大学キャンパス言葉辞典 第3版』(1993

年, 永瀬治郎)

- ・『すっきゃねん若者言葉辞典 梅花女子大学のことば』(1993年, 米川明彦)

ここに挙げた6つの語彙集をみると1つを除いてすべて収集された場所は関西地区に限定されており、また、収集時期も1992～1996年と4年という短期間に限られている。複数の語彙集をまとめているということからも察せられるとおり、編者による収集語彙選択のかたよりもそれほど強くは働いていない。米川(1997)は「1990年代半ばの、関西を中心とした若者ことばの語彙集」として、質的にも量的にも安定したものである。若者ことばの語彙集として、ある一時点、ある一地域に限定して編集された総括的なものとしては、筆者が知る限りでは米川(1997)が唯一のものである。

## 3. 若者ことばの通時的研究について

若者ことばはある一時期の語彙を収集するのさえ困難であるため、通時変化を確認するのはさらに難しい。そのような状況下で、『現代用語の基礎知識』(自由国民社)等の年鑑形式の事典・用語辞典<sup>2)</sup>の分析、または個人の研究者による同一地域(大学等)に限定された、長期的な研究成果によって、若者ことばがどれくらいの年数使用されるのかという、いわば「若者言葉の寿命」とでもいうべきものを探求したいいくつかの先行研究がある。

米川(2009)は、『現代用語の基礎知識』(自由国民社)の1980～2008年版の「若者言葉」の項に掲載されている語のうち、サ行で始まる語だけを取り出して、同一語が何年掲載されていたのかを集計した。その結果は、1年しか掲載されない語が過半数で、2年以下は合計約70%、3年以下で約80%となり、「死んでる」(23年)、「さむい」(17年)など、掲載年数の長いものも含まれるなか、平均で2.6年という結果をえている(米川2009:582)。

同一集団に対する、同一研究者による通時変化を確認したものとしては、米川(2012)、永瀬(1999)がある。

米川(2012)は、自身が1990～1992年に収録した学生語(キャンパス用語, 梅花女子大学)339語に対し、2012年に30名の学生(同じく梅花女子大学)に対して使用状況、認知状況を調査した。その調査結果を次のように結論づけている。

(4) 梅花女子大学における1992年の学生語の、2012

年の使用状況（米川 2012: 46 より）

- ・全体の約 1/2 の語……消滅
- ・全体の約 1/3 の語……依然として使用されている。
- ・全体の約 1/6 の語……やがて消えゆく運命にある。

永瀬（1999）は、自身による、専修大学における 1988年、1990年、1992年、1996年の 4 回にわたる学生用語調査（調査語彙約 4000語）を分析した。その結果、4 回の調査とも出現した語は 49語で全体の 1.2%（8 年間継続して出現したことを表す）、後ろ 3 回に限定してもさらに 30語が加わるのみで（6 年間継続して出現したことを表す）、両方あわせて 79語となるが、これは全体の約 2% に過ぎないとし、残りの大部分の語（約 98%）は 5 年以内に使われなくなると結論づけた（永瀬 1999: 16）。

以上をまとめると、母集団や分析対象の年数は異なるものの、米川（2009）と永瀬（1999）は、奇しくも同様に 5 年未満のうちに大部分の若者言葉が使用されなくなると結論づけている。また、長期にわたって継続的に使用される若者ことばについては、総じて少数に限られることが導かれており、そのような語彙について、米川（2012: 48）は「二〇数年の歴史を持つ一般語に近いもの」、永瀬（1999: 24）は「生活に密着した`遊び、の少ない語」と表現して、この種の語彙を特徴づける。これは、桑本（2003a）で指摘したいくつかの若者ことばの定着の特徴を裏付けるものとなっている。

- (5) 若者ことばとしての定着の特徴（桑本 2003a: 119, 一部改編して抜粋）
- a. 使用場面が広いこと
  - b. 形態的派生形が存在すること
  - c. 意味の転換
  - d. あいまいな表現
  - e. 符丁的すぎるものは定着しない
  - f. テレビを通じて流行った芸能人の言動を発生源とするものは定着しない。

#### 4. 若者ことばの通時的研究に対するデータベース利用

##### 4.0.

前節で紹介した若者ことばに関するいくつかの通時的研究は、語彙集に基づくものであり、この研究方法では、語彙の大まかな出現時期および消滅時期

の特定と、それに基づく出現期間などは示されるが、ある一定量のテキストの中での出現頻度による定着の度合いを分析対象にはできない。筆者は、若者ことばの出現頻度を通時的に観察し、その出現や定着の度合いを分析できるものとして、テレビの連続ドラマの台詞のデータベースが最も有効であると考えた。いくつかの時期のドラマのデータベースを利用すれば、それらを相互に対照させて分析することで、若者ことばの語彙の通時的な変化を分析できる。本節では、はなしことばとしての若者ことばの言語資料としては、連続テレビドラマのデータベースが効果的であるとする根拠について述べる。

##### 4.1. 書写媒体か音声媒体か

データベースを利用する場合、書写媒体は音声媒体に比べるとはるかに容易に既存のものを入手でき、作成も比較的容易であり、分析しやすい。若者ことばを含む媒体としてはインターネット上のブログ、ツイッターなどの書き込み、または個人の携帯メールの文面などが考えられる。これらを媒体とするデータベースのテキストの分析を若者ことばのものとしてあてることは可能であるが、音声によるコミュニケーションのなかで運用される若者ことばに比べると、上記のネットワーク上での文字や記号で打ち込まれた情報による若者ことばの反映は、極めて限定的であることは容易に予想される。また、パソコンや携帯メールを介する書写媒体は、いわゆる若者ことばではなく、インターネット上での限定的で、場合によっては排他的な、パソコン愛好家のなかだけで流用される集団語と位置づけられることもある。また、「w（「笑い」の意）」などの記号や「(^\_^)」などの顔文字など、音声に還元できない文字列や記号の羅列による効果もあり、これらは書写媒体独特の表現方法であって、音声のコミュニケーションによる中核的な若者ことばからは一線を画するものである。これらの点から、書写媒体よりも音声媒体が若者ことばを含むデータベースとしてははるかに有効であると考えられる。

##### 4.2. 連続テレビドラマのデータベースとしての有効性 <1> 一質的な要素一

若者ことばの語彙のデータベースとして、テレビドラマが最適であることについて考えてみたい。

熊谷（2003）は、ドラマの台詞を研究素材や日本語学習用教材に利用することの利点について述べている。ドラマにはシナリオがあって、いわば創り出されたことばのやりとりであるから、ある程度の不

自然さやわざとらしさがつきまってしまう、自然発話からは多少なりとも隔たってしまうという欠点はある。しかしながら、ある種のコミュニケーション・パターンを自然発話の会話のなかから収録して探し出すとなると非常に効率が悪いなどということが発生する（熊谷 2003: 11）。さらに、メイナード（2001）の恋愛感情の表現に関するドラマの台詞のデータを用いた研究を引き合いに出し、この種の言語行動について、許諾を得て自然会話の例を集めるのが困難だとも指摘する（熊谷 2003: 11）。また、収録するのに同等の労力を要すると思われる他のテレビの番組、例えば、バラエティ、討論番組、スポーツ中継などに対して、ドラマには自然会話のもつ自発性や即興性ははるかに少ないとしながらも、「親子げんか」「病気の友人のお見舞い」「仲人の依頼」「葬儀でのお悔やみ」「近所の人との立ち話」などの場面のやりとりが展開しているのはおそらくドラマに限られ（熊谷 2003: 8）、コミュニケーション・パターンを確認し、収録しやすいという利点をもつ。

ドラマと同じく台詞のやりとりで成り立っている舞台演劇、映画などとの比較においても、コミュニケーション・パターンの収集・分析はドラマが最も効果的であることについて、水原（1999）が考察している。

舞台演劇は、自然会話に比べると概して台詞が長く、また独白があったり、演者同士の対話を向かい合わないで観客の方を向いて行う、などといった、通常の会話のやりとりからはるかに逸脱した状況が多い。また、身振り手振りが大袈裟だったり、衣装が派手であったりと、言語外の様々な要素も非日常的である。これらは舞台演劇に特有の効果ではあるが、自然会話を模したデータとして扱うには不都合である。

映画の台詞は、舞台演劇、ドラマに比して最も短いとされる（水原 1999: 29）。風景や発話場面の遠景、または演者の表情をアップにした映像を台詞なしで映すという効果が多い。映画の台詞は短いものが多く、言葉を激しくぶつけ合い、語りかけるドラマチックなエネルギーや言葉のうねりがない（水原 1999: 30）。したがって、やはり自然会話の擬似的日常語のやりとりとしては、その効果は薄いといわざるをえない。

テレビドラマは、台詞の長さは、舞台演劇より短く、映画より長く、適度に自然会話に近いとみなしてよいだろう。ストーリー展開も常に日常性が要求されるし<sup>3)</sup>、現実離れした描写があったとしてもそこに展開する会話のやりとりには、いかにもその年

齢、性別、職業の人物が発しそうなことばや相づち、反応が盛り込まれ<sup>4)</sup>、会話のデータとしては自然発話により近いものとみなせる。

#### 4.3. 連続テレビドラマのデータベースとしての有効性 <2> —量的な要素—

前節では、テレビドラマの台詞のデータが、バラエティやスポーツ中継など他のテレビ番組にない日常場面を描いているという点において、舞台演劇や映画など、台詞をもつ他のジャンルのものと比べて、自然発話に近いデータを有しているという点において、質的な価値において有効であることを述べた。本節では、量的な観点において、放映時間が1回1時間全11話程度の連続テレビドラマが、データベースとして最も効果的なものとして活用しうる根拠について述べる。

連続テレビドラマは、様々な形態があるが、民放各社を中心として週1回3ヶ月放映されるものが最も一般的である。この形態の連続テレビドラマは、放映時間1時間の1回分のドラマの本編時間は、CM、次回予告などを除くと、約45分である。これが平均的に11回程度で、初回や最終回に時間が延長されている場合もあるが、全体ではほぼ8時間30分程度で一定している<sup>5)</sup>。時間の長さがほぼ一定しているということは、複数の作品同士を均質的に比較しやすいという利点をもっていることになる。また、同じクール（3ヶ月を1単位とした1年を4期に分けたもの）で各テレビ局が3～4本制作して放映されるため、1年間に放映される同種の連続ドラマは約50作品程度となる。データベースを作成して、語彙の出現などを分析する際に、ある一定の（本稿の趣旨に沿えば若者ことばが出現しやすいという）条件のもとにドラマの性質を限定的に選定する場合は、選択する母集団が巨大であるほうが便利である。ある年のある条件のものを選択する場合、50作品程度のなかから選定できるわけであるから、適切なものにいきあたる可能性は非常に高くなる。

放映時間の長さに関して、8時間30分という時間はどうか判断されうるだろうか？

1話完結の単発ドラマは大抵2時間程度と、連続ドラマの8～9時間に比して短めであるから、十分な量のデータが反映されるという点に関して劣る。また、2時間でストーリーが完結するために、展開が速く、そのための説明的なくどい台詞が多くなったり、ゆとりのあるストーリー展開のなかでの自由な会話のやりとりも少なくなっているように感じられる。

NHK連続テレビ小説（朝ドラ）、大河ドラマ（大河）などは量的には3ヶ月の連続ドラマをはるかに上回り、各作品の放映時間も均質的にそろっているが<sup>6)</sup>、それぞれ半年、1年で1作品と作品数が限られ、また、朝ドラは20～50年の主人公の年代記である場合が多く、大河は原則的に時代劇であり、放映時の現代を描いたものではなく、ある一時点の語彙の集合体とは見なせないし、現代や近現代の世相語が反映したものとしても不適切である。

以上の考察により、はなしことばとしての若者ことばの言語資料としては、テレビドラマ、しかも1回1時間の全11回程度の、最も一般的に見られる形式の連続テレビドラマを利用したデータベースが最も効果的な分析対象となることがわかる。なお、条件によっては、若者ことばに限らず、様々な性質のはなしことばの語彙群について分析することは可能である。次節では、若者ことばの語彙を収集するためのテレビドラマの選定基準について述べる。

## 5. データについて

本稿における研究は、若者ことばを収集する目的でドラマのデータベースを作り、異なる年代の作品のものいくつか取り上げて比較するものである。データベースとして、若者ことばがより出現しやすい連続テレビドラマを選定するために、筆者は以下の(6)のような基準を設定した。

- (6) データベースのための連続ドラマ選定の基準
- a. 年代設定が放映時の現代であること。
  - b. 中心的な登場人物が20代半ばくらいの若者数名である。
  - c. 主要登場人物は、男女が適当に交じっていること。
  - d. 主要登場人物を演じるキャストの放映時の実年齢も同じく20代半ばであること。
  - e. 主人公たちの家庭（親、きょうだいとの会話が想定される状況）は中心的な場面となっていないこと。
  - f. 登場人物たちの感情ののった生き生きとした表現が期待できるので、できればラブコメディである。
  - g. 医療現場や法曹界など高度に専門的な用語が飛び交う状況下のものは避ける。
  - h. SFやホラーなど状況が非現実的な場面設定のものは避ける。

(6a-e)の基準は、ドラマ放映時の若者ことばが最も如実に反映されるべき条件を模索した結果である。筆者が最も重視しているのは(6d)の、キャストの実年齢が20代半ばにそろっていることである。ドラマにはシナリオがあつて、キャストはシナリオに沿って台詞を発話するが、ときにアドリブがまじり、それがかえって生き生きとしたキャスト個人の言語使用を反映した若者ことばである可能性もあるからである（桑本 2014: 73）。そういう意味では、放映後に発行されるシナリオ本やノベライズ本、また放映時のテレビやDVDの操作で表れる日本語字幕は規範的なものに変更されている場合もあり、そのままデータとして扱うのは慎重になるべきである<sup>7)</sup>。データベースを作成する際には、手間はかかっても音声をそのまま文字起こすという作業がどうしても必要である。たとえば、語末の音調をあげるかどうかや、台詞の間（ま）の長さなどという情報は、既に文字化されたシナリオ本やノベライズ本では確認できない。偶発的にキャストが発してしまった発話もすべて無視されてしまう。

また、(6g, h)などの項目も、若者が発する自由な発話が阻害さたり制限されたりする可能性があるので慎重に考慮する必要がある。

## 6. まとめ

以上、若者ことばの通時研究のために、ある時点での豊富な量の会話を含むデータベースの源泉として、45分×11回程度の連続テレビドラマの音声が適切であることを述べた。それは、インターネット上の書き込みなどの文字情報ではなく、テレビの他のジャンルの放送、例えば、バラエティ番組、スポーツ中継などでもなく、また、台詞のある他の芸能、たとえば舞台演劇や映画などであってはならない。また、長さも45分×11回程度の連続ドラマであるべきで、これは、長さがデータベース作成上の負担からしても、分析可能な分量を備えているという点からも、適当であることと、この形式のドラマの年間の放映件数が非常に多く、条件にみあった作品を選びやすいという点に基づいている。筆者は第5節において、若者ことばの語彙の収集ということを考慮し、8つの条件を設定した(6)。中心的な登場人物（同時にそれを演じるキャスト）が20代半ばの、若者ことばを日常的に使用する典型的な年齢層に合わせ、キャストのアドリブなどを含めて、若者ことばが現れやすい状況を想定した。その他、「なるべく登場する若者達の家庭環境が舞台として描かれな

い」「医療現場，法曹界がテーマのものは避ける」などのいくつかの条件を考案し，若者ことばが現れやすいデータベースのためのテレビドラマ選定の，今後の研究に向けての指針とした。

筆者は，本稿の考察に基づいて，実際に1990年代，2000年代，2010年代の連続テレビドラマを選定し，台詞の音声文字化したデータベースを作成し，それらを相互に対照・分析して若者ことばの通時変化を考察した。この成果については桑本（2016，編集）で別途述べる。

### 注

\* 本稿は東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」第2回ワークショップ（2015年9月8日，於東北大学）における口頭発表に基づき，その一部について加筆修正したものである。

- 1) たとえば，「女子」という若者ことばは「女子会」の構成員が30代後半ぐらいでも成り立つことなどからも推察されるとおり，いわゆる「若者ことば」の使用者の年齢の上限を40歳くらいまで引き上げる必要があると思われる。
- 2) 『現代用語の基礎知識』（自由国民社，1948年～現在まで毎年）の他に，同種の年鑑形式の用語事典として『イミダス』（集英社，1986～2006年），『知恵蔵』（朝日新聞社，1989～2006年）があったが，いずれも『現代用語の基礎知識』よりも極端に歴史が浅く，またどちらも2007年版（2006年発行）をもって休刊になっており，現在も継続的に分析が可能なのは『現代用語の基礎知識』が唯一のものである。現在入手可能な，経年的に分析可能なデータベースとして，『Logo Vista電子辞典シリーズ 現代用語の基礎知識 1996～2015 20年分特別パック』（CD-ROM，ロゴヴィスタ）がある。
- 3) 水原（1999:29）：「一見どんなに荒唐無稽な物語でも，それは見ている視聴者の身近で起こり得る話という前提がある。従って，ドラマの舞台は我々自身の家であり，マンションであり，会社，街角，喫茶店であり，いつかは自分が訪れるかも知れない旅先の土地である。登場人物の着ている服装も，自分の周辺で見ると大差はない。」
- 4) 熊谷（2003:7）：「もし花嫁姿の女性が突然自分の家にのりこんできたとしたら，二〇代半ばの男性がいかにもとりのような行動，発しそうなこ

とば，それを登場人物が体現していれば，その意味ではそのドラマ（のことばや言語行動）は「現実を映している」といえるだろう。」

- 5) 桑本（2014）で「SUMMER NUDE（サマーヌード）」（2013年7月～9月，全11回，フジテレビ系）のデータベース作成について報告したが，当作品全編の放映時間は約515分（8時間35分）だった。
- 6) 朝ドラは月～土曜日1回15分が25～26週で37～39時間程度，大河は毎週45分で50回が基本として，やはり37～38時間程度である。
- 7) 小矢野（1996）は，ドラマの台詞の言語運用に言及する際，容易に目に触れるノベライズ版の台詞と，実際の放送時のものが相当食い違っている点を実例を挙げて言及している。

### 参考文献

- 熊谷智子「シナリオのある会話」『日本語学』第22巻第2号，明治書院，6-14，（2003）
- 桑本裕二「若者ことばの発生と定着について」『秋田工業高等専門学校研究紀要』第38号，113-120，（2003a）
- 桑本裕二「若者ことばの形態論的および意味論的考察にもとづく諸特徴について」『東北大学言語学論集』第12号，65-78，（2003b）
- 桑本裕二「日本語の若者ことばの英訳語彙集」<http://www.akita-nct.jp/~kuwamoto/wakamono.html>（2006年3月28日最終更新。2015年10月31日閲覧）（2006）
- 桑本裕二『若者ことば不思議のヒミツ』秋田魁新報社，（2010）
- 桑本裕二「若者ことばにおける曖昧表現の形態および意味構造の変異について—テレビドラマのデータベースの通時研究への利用を目指して—」『秋田工業高等専門学校研究紀要』第49号，68-75，（2014）
- 桑本裕二「若者ことばは通時変化を確認できるか？—テレビドラマのデータベース作成とその分析結果より—」小川芳樹・長野明子・菊地朗編『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』開拓社，16p，（2016，編集中）
- 小矢野哲夫「『ロングバケーション』の若者ことば」第6回すつきゃねん若者ことばの会配付資料（1996年11月16日，於大阪府高槻市立生涯学習センター，<http://www001.upp.sonet.ne.jp/ketoba/long.html>より入手可能，2015年11月2日閲覧），

- (1996)
- 小矢野哲夫「流行語に見る今の世相」『日本語学』第21巻第13号, 明治書院, 44-54, (2002)
- 永瀬治郎「語の盛衰－キャンパス言葉の寿命－」『日本語学』第18巻第10号, 明治書院, 14-24, (1999)
- 中東靖恵「キャンパスことば研究のこれまでとこれから」『岡山大学言語学論叢』第11号, 17-28, (2004)
- 水原明人「作る談話・脚本製作の現場」『日本語学』第18巻第11号, 明治書院, 28-39, (1999)
- メイナード, 泉子・K『恋するふたりの「感情ことば」－ドラマ表現の分析と日本語論－』くろしお出版, (2001)
- 米川明彦『若者ことば辞典』東京堂出版, (1997)
- 米川明彦『集団語辞典』東京堂出版, (2000)
- 米川明彦『集団語の研究 上巻』東京堂出版, (2009)
- 米川明彦「学生集団のことばの変化」『日本語学』第31巻第11号, 明治書院, 38-49, (2012)